

原発部会、「2019さよなら原発アクション」に参加

～「原発文庫」と「モニタリングポスト見学ツアー」のまとめ冊子づくり～

※文中の「MP」は「放射線モニタリングポスト」のことです。

3月10日、高崎城址公園の会場に着いた時には、福島第一原発事故以来毎年行われている「さよなら原発アクション」はすでに始まっており、多くの参加者で賑わっていました。いろいろな団体のPRやチラシを受けながら『原発文庫』の所へ向かうと、田村夫妻が本を並べMPツアー冊子を勧めていました。立ち止まって見て下さる方は老若男女様々ですが、関心の高さがうかがえました。この集會に参加する人達は原発に関心があるからなので当然ですね。



しかし、社会全体の中では原発事故の事も放射能汚染についても関心が薄らいできていていると感じています。新聞やテレビ・ラジオ等の報道も3.11が近づくと急に特集を組んだりしますが、日常的に追求している所は少ない様に思います。そういう私もこのフォーラムで原発と自然エネルギー研究部会に関わらなければ、とうに関心を無くしていたかもしれません。今回部会でまとめたMPツアー冊子が出来た事により、自分だけの関心事ではなく周囲の人に関心を持ち続けてもらう為の1つの材料として提供できる様になりました。これは私たちが部会で学んだ事考えた事を発信する一歩となり、私たちの今後の活動の原動力となると思います。以下、活動の詳細をご覧ください。(加納順子)

貸し本屋『原発文庫』は対話の場

田村 ゆう子

去年に引き続き、2回目の出店をした。キャッチフレーズ「返却は来年のこの日に」を反古にしないためでもあった。1年後、全部ではないが本は返ってきた(キャッチフレーズはこの日だが、期限なしと書いてもあったのだから)。寄贈本とたくあんのおまけがついて返ってきた本もあった。新たな寄贈もあった。昨年出店したとき、30数冊であった貸し本はこの1年間で120冊を超えた。この日貸し出した本は13冊(前年12冊)であった。

真正面、広場の周りを囲むように並んだ露店の真ん中あたりという好条件の位置であった。それに、竹の先につるした赤地に黒の原発文庫の筆字が遠くから目立っていた。絶えず行き交う参加者の流れがあった。たくさんの方が立ち止って本を眺めたり、手にとってくれたりした。そこで会話が生まれる。本の内容の話、日本の原発の現状や原発事故関連の憂鬱であり、許せない話、はたまた老いて本をどう処分するかの話など初めて出会った人たちとも話はずんだ。時々、ステージの音が大きくて聞きづらいこともあったけれど。

今年の『原発文庫』は、広場をはさんでステージの

「さよなら原発」集會への『原発文庫』出店の意義の一つは、本を介したさまざまな人との語ら



いの機会が持てるということだと思う。今回、私たちの作成した冊子「モニタリングポストツアー報告」を本とともに並べ薦めた。関心があり、用意した50冊はすべてなくなってしまった。

群馬県のMP踏査を終えて 田村 広史

福島第一原発で汚染されたのは、福島県だけでなく、私たちの住む群馬県もそうである。部会では、足元の汚染状況を直接、目で見たいということで手持ちの測定器を持って、県内のMPを2015年から踏査することになった。

MP踏査では、部会員の原田喬氏があらかじめ自治体に連絡を取っておいたり、踏査すべき場所の下見をしておいたりしてから本踏査を行った。実際に行ってみると、下見なしではとても見つけるのが難しい所ばかりだった。

3年にわたる計5日間25か所の踏査で気づいたことを挙げてみる。

- ①すべてのMPで国の基準を下回る放射線量だったが、地域差があり平野部より山間部の方が、より汚染されているようだ。
- ②県衛生環境研究所の、地上からの高さの異なる2つのMPの比較から、地上からの高さの低い方が放射線量が高いようだ。
- ③MPの単位はGyであり、国によるとSvへの換算は1Gy=1Svでよいとしているが、その方法で手持ちの測定器の数値と比較すると、すべてのMPで手持ちの測定器の方が高く、平均約1.4倍であった。しかしその理由は私たちにはよくわからない。
- ④MP本体に近い地点と遠い地点の放射線量を、手持ちの測定器で比べると遠い方が高いこ

とがあった。そのようなMPでは、示す数値が周辺の放射線量を代表していないかもしれない。

- ⑤現在のMPの数値はいくつかのMPを除いてすべて、国が示す自然放射線量（ガンマ線の部分）

0.04 μ Sv/h (=0.04 μ Gy/h)を下回っている。これは、原発事故による追加被曝がほぼなくなったからではなく、群馬県の自然放射線量もともとそれより低いからなのかもしれない。

当初、MP踏査の提案があった時、私としては25か所すべてを回ろうと思わなかったが、結果としてすべてを踏査してよかったことがある。それは最後から2番目に踏査したMPだけに説明板が掲示してあったことである。

このように、MPのわかりにくい設置場所、ほぼ存在しない説明掲示板、たとえあったとしても難しい数字と単位の意味など、問題点が多いことがわかった。(詳しくは「別冊 育ちと学び モニタリングポストを知っていますか?」をご覧ください。問合せ先は裏表紙。右上写真)



さよなら原発アクション前日講演報告

坂田 尚之

東海第二原発の避難はムリ!?

講演者の花山ちひろさんは東海村出身で水戸に住む3児のお母さん。東海第二原発運転差止裁判の原告で茨城原発集会の発起人の一人。

東海第二原発は群馬県に住む私たちにとって、新潟県の柏崎原発とともに無関心ではいられない原発の一つだ。用意された資料には東海第二原発についての具体的なデータが書かれ、花山さんは私の知りたかった避難計画の実行不可能に近い実態について語った。群馬に住む私たちが行うべきことの一つは、その時の群馬におけるシミュレーションかもしれない。

元南相馬市市長 桜井勝延さんの言葉

桜井さんは“あの時”の悪戦苦闘をネット配

信して世界に訴えたことにより「世界で最も影響力のある100人」に選ばれた人だ。当時も今も桜井さんの采配に賛否両論あるという。仮置き場となった田畑の汚染土を埋め立て再利用する提案をしたが非難を受ける。しかし、彼は言う、「政府の言うように、後10年待ってくれと70の年寄りに言えますか?」と。

「当たり前前の生活をするには原発はいらない。稼働させるのに安全審査をする、バカげていませんか?」「奪われた命、家族、地域、生活。一つひとつ取り戻すことがやることだ。」

桜井さんの分断を訴える言葉が重く響いた。